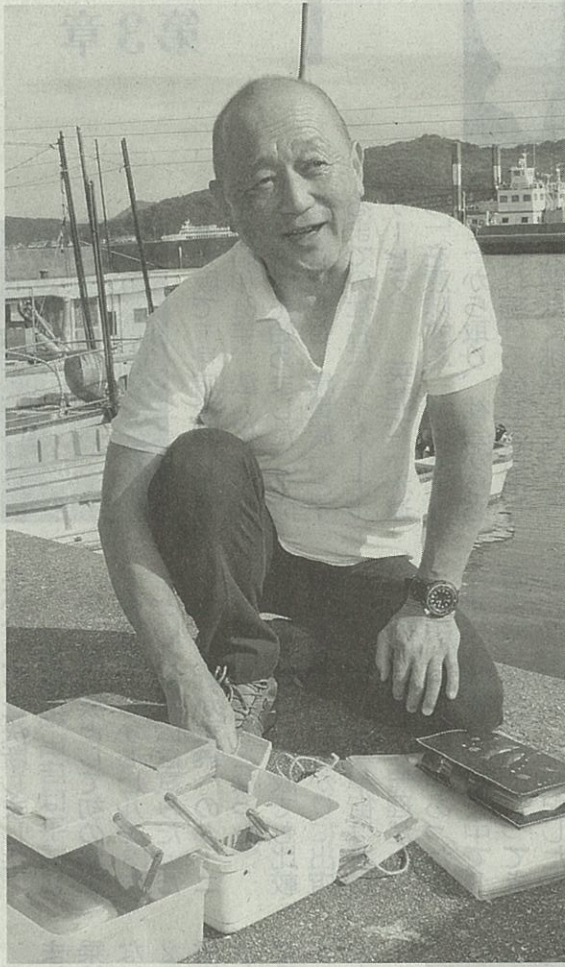




アマモ場再生に尽力する岡山市のNPO法人  
「里海づくり研究会」事務局長

たなか たけひろ  
**田中 丈裕さん**(62)



こつこつと、種まきを続けて30年余。岡山県有数の漁師町・備前市日生地区で、日生町漁協が取り組むアマモ(甘藻)場の再生に身を投じてきた。

今年6月に同市で開催された第9回「全国アマモサミット」では実行委員長を務めた。実践発表を通じて「先進地」の「面目を保てた」と自負する一方、「本田和土さん(元同漁協組合長、故人)に見せたかったな…」との思いも。

大阪市出身。幼少期から「海や魚が好き」で、高知大栽培漁業学科などを経て昭和54年に岡山県庁入り。水産部門の技師として現場に出た56年、日生地区で慢性的な不漁が続くなか、本田氏と出会った。本田氏は、不漁の原因は「かつて

約590畝から10畝ばかりになったアマモの激減にある」と断言した。

アマモは外敵から魚を守る産卵場所として、今でこそ「海のゆりかご」と呼ばれるが、当時は船のスクリューにからみ付く「邪魔藻」の扱い。「県はいち早く効果を認めていたが、まだ漁師間ではデメリットが先行していた」と振り返る。

県は、アマモの種子採取技術が確立した60年、日生で繁殖を導入。本田氏の熱心さに応え、アドバイザーとして歩みを共にし、ダイバーの資格を生かして種まきに適した場所や繁殖具合の確認で幾度も潜水調査を行った。

試行錯誤が続くなか、地質浄化に特産品のカキの殻

が有効とわかった。平成9年に水質の復調が見えたが、台風でアマモは全滅。

そんな試練も「若手漁師の奮起」で乗り越え、19年に約80畝、27年には約250畝まで回復した。アマモの増殖に伴い、港内に大量の流れ藻も浮遊。回収には地元・市立日生中学が参加し、現在はアマモの研究を授業の一環に加えている。「里海づくりは人づくり」と実感した。

23年に県水産課長で退職。24年に「里海づくり研究会」(岡山市)を立ち上げた。農業なら土壌改良のような地道な作業。「だが海の中は陸地ほど人為的に対処できず、畏敬の念を忘れてはなりません」

(横山一彦)